

初年次必修科目「キャリア設計Ⅰ」のプログラム評価と 潜在的要望の可視化への試み

——質問紙調査のクラスタ分析とテキストマイニングを通して——

町田 小織・酒井 郷平・長谷川 明弘

キーワード：キャリア教育、授業評価、クラスタ分析、テキストマイニング、共起ネットワーク

career education, course evaluations, cluster analysis, text mining,
co-occurrence network

1. はじめに

東洋英和女学院大学のキャリア教育はどうあるべきだろうか？この問いに向き合うには、まずキャリア教育とは何か（WHAT）を知らねばならない。そして、なぜキャリア教育をするのか（WHY）を考えなければならないだろう。それらが学内の教職員で共有されて初めて、いかにしてキャリア教育に取り組んでいくか（HOW）の議論になる。しかしながら、紙幅の都合もあり、キャリア教育とは何か（WHAT）、なぜキャリア教育をするのか（WHY）をここで述べることは差し控える。本稿では、実際に本学で実践しているキャリア教育科目に対する受講者の声を拾い、そこから今後のあるべき方向性を模索したい。すべては学生のためにあるのだから、答えは学生の中にある。しかし、学生自身がneedsやwantsを把握していない場合もあり、それらは必ずしも顕在化しているわけではない。受講者が回答した質問紙調査結果から導き出された分析・考察をもとに、その潜在的な学生の要望や思いを掘り起こし、可視化することが本稿の目的である。

2-1. 対象となる授業実践

本稿で採り上げる科目は次の通りである。

科 目 名：キャリア設計Ⅰ

対 象 年 度：2018年度

開 講 期 間：前期

曜 日 時 限：水曜1限

配 当 年 次：1

履 修 対 象 者：全学科1年生（567人）および再履修者（48人）

履 修 登 録 者：605人 ※学科別の内訳は表1を参照

ク ラ ス 編 成：約120人ずつ5クラスにし、5人の専任教員が担当

最終試験受験者数：547人（全履修登録者の90%）

本科目は学科共通の初年次必修科目として配置されている。シラバス、各回の詳細については文末の参考資料を参照されたい。

尚、以下の用語は本稿において次のように使い分けることとする。

学 生：広く英和生全般

受 講 者：2018年度「キャリア設計Ⅰ」を履修した者

プログラム：1回分（90分）の授業だけでなく、部分的に導入したコンテンツや、輪講のように90分×5回のオムニバス式授業全体を示す

講 義：ペアワーク、グループワークを含まないレクチャースタイルの授業

2-2. 先行研究

さて、本学におけるキャリア教育はどのような変遷を辿ってきたのだろうか。先行研究である川崎ほか（2013）によると、正課科目として「キャリア設計」が導入されたのは、2010年度のカリキュラムにおいてである。2015年度のカリキュラムより「キャリア設計Ⅰ」と名称変更し、2018年度が「キャリア設計Ⅰ」の完成年度であり、「キャリア設計」としての最終年度¹となっている。

前述の川崎ほか（2013）によると、科目開設のきっかけは2007年卒業生調査の結果からであった。卒業生による自由記述のコメントを大別すると次の3つとなる。①就職活動への準備が不足していたことへの後悔、②不本意就職になったことへの嘆き、③早い段階からキャリア教育があればよかった、という声である²。以上のことから、本学初のキャリア教育（正課）科目である「キャリア設計」は、やや就職支援に寄った形でスタートしたといえる。ただ2010年当時は、各省庁も若者の就職支援・就業力育成に力を入れていたため、さような時代背景も大きく影響している。実際のところ、本学は2009年に「卒業生活用による就職の早期意識化と基礎学力強化による就職支援」として文部科学省の「学生支援推進プログラ

1. 2019年度より「ライフデザイン」が開講予定。

2. 川崎末実・澁谷隆良・坪内千明・町田小織「東洋英和女学院大学初年次前期必修科目『キャリア設計』の成果と課題—大学生活およびキャリア形成に対する意識の変化という観点からの検討—」『人文・社会科学論集』東洋英和女学院大学、第31号、2013年、p.82

表 1. 全履修登録者の学科別内訳

人間科学科	保育子ども学科	国際社会学科	国際コミュニケーション学科	全履修登録者 (人)
207	104	159	135	605

ム」に選定されている。

こうした背景の下、2010年度より開始した「キャリア設計」では、2013年度の調査により次のような知見を得ている。本科目が受講者に一定の影響を及ぼしていることは認めるものの、『卒業後の進路』や『就きたい仕事』がわからない学生たちがそれを明確化するには至っていない³。この点が半期15回、大人数・大教室での授業の限界であり、課題である。

それでは、学生に影響を与えたものは何だろうか。川崎ほか（2013）によると、「キャリア設計のプログラムの中で、将来に対する自分の考え方に最も影響を与えたものは何か」という問いに対し、卒業生講演会という回答が237（有効回答数：504）であった。全回答のほぼ半数を占める47%である。「英和生は英和生の言葉に心を動かされる」こと、後輩の力になりたいという先輩が多いことが本学の特徴である。

2-3. 研究の目的

まず、2010年度より9年間継続した「キャリア設計」の総括をするためにも、本研究は受講者が本科目をどう評価しているかを調査し、学習者にとって効果的なプログラムを検証することを目的とする。同時に、受講者の質問紙への回答をもとに、その特徴や傾向を分析し、研究結果を学内教職員で共有するためでもある。なぜなら、本学の学生のためのキャリア教育をオーダーメイドするためには、まず英和生が（自身が無自覚な部分も含めて）何を求め、何を必要としているかを知らなければならないからである。

3-1. 調査方法

全プログラムが終了する第14回の授業において、全出席者に質問紙調査を依頼した。但し、回答の有無、内容に関しては成績・評価に一切関係しないことを受講者へ説明している。これは調査というだけでなく、受講者が質問紙に回答することによって、14回の授業を振り返る機会にもなっている。

調査目的等の詳細については次の通りである。質問紙の各設問項目については文末の資料を参照されたい。

3. 川崎ほか（2013）、前掲論文、p.117

調 査 目 的：本科目は1年生前期の全学必修科目として開講している。キャリア教育のみならず、初年次教育でもあるため、これからの大学生活をどう充実させるか、受講者が前向きに考えるための仕掛けをし、主体的に学習したり、人間関係を構築したりしていこうとする、内発的動機づけの機会となるようプログラムを組んでいる。受講者が本科目によってどう意識を変え、さらに行動に移したのか(あるいは移そうとしているのか)。それは何がきっかけだったのか。どのようなことをもっと知りたいと思っているのか、等々について、質問紙調査を通じて検証を試みる。

調 査 日 時：2018年7月11日（水）1限

調 査 対 象：7月11日授業出席者

有効回答数：459人 ※同じ学籍番号による複数回送信は最後の回答を採用

回 答 率：84%（試験受験者を分母とする場合）／76%（全履修登録者を分母とする場合）

方 法：Google フォームズ

回 答：設問はすべて必須回答

※学籍番号を入力してもらう理由は、一定の回答率を確保することと学年および学科を把握するため

3-2. 調査結果

本稿では、調査項目のうちQ1～5、及び10を用いて分析・考察を試みる。それゆえ、対象とする設問のみ以下に簡略化してまとめる。

Q1. 出欠状況について

Q2. 「キャリア設計Ⅰ」が自分自身や“自分の人生”を考える上で参考になったか

Q3. 最も自分に影響を与えたプログラム

Q4. 2番目に影響を与えたプログラム

Q5. 3番目に影響を与えたプログラム

Q10. もっと知りたいと思ったこと

まず回答者がどのような受講者で、どのように本科目に臨んだのかを測るため、出欠状況(Q1)について確認した。その結果は表2の通りである。人間科学科では無欠席が40% (57人)、1回欠席が26% (37人)、2～4回欠席は33% (47人)、5回以上欠席は1% (1人)であった。保育子ども学科は無欠席が45% (33人)、1回欠席が28% (21人)、2～4回欠席が24% (18人)、5回以上欠席が3% (2人)である。国際社会学科は無欠席が47% (61人)、1回欠席が33% (43人)、2～4回欠席が20% (25人)で5回以上欠席はゼロである。国

際コミュニケーション学科は無欠席が57%（65人）、1回欠席が24%（27人）、2～4回欠席が18%（21人）、5回以上欠席は1%（1人）である。

多くの受講者が単位取得条件（5回未満の欠席）を満たす出席状況で履修していたことが、表2から明らかである。このことから、以降の設問についても、ほとんどの授業回を見聞きした上で、回答していることが窺える。

次に、本科目に対する満足度を測るために、Q2.「キャリア設計Ⅰ」は、自分自身や“自分の人生”を考える上で参考になったかどうかを訊いた。表3の通り、人間科学科は全体の86%（123人）が「とてもそう思う」「そう思う」と回答。保育子ども学科は93%（69人）、国際社会学科は88%（114人）、国際コミュニケーション学科は83%（95人）が「とてもそう思う」「そう思う」を選択し、肯定的な評価をしている。

学籍番号のみの記入とはいえ完全匿名ではないため、そこは勘案して結果を捉える必要があるが、全体として科目のねらいは達成できたのではないかと考える。

僅かながら、本科目が「全く参考にならなかった」と回答した者の出欠状況を確認したところ、無欠席3人、2～4回欠席が2人であった。前者は必修科目であるため、休まず出席しているものの、本科目の意義が見出せないまま終わったということだろう。反対に、5回以上欠席を選択している4人は、いずれも「そう思う（＝参考になった）」を選んでいる。

表2. 出欠状況に関する学科別の度数分布表

	人間科学科	保育子ども学科	国際社会学科	国際コミュニケーション学科
無 欠 席	57 (40%)	33 (45%)	61 (47%)	65 (57%)
1 回 欠 席	37 (26%)	21 (28%)	43 (33%)	27 (24%)
2～4回欠席	47 (33%)	18 (24%)	25 (20%)	21 (18%)
5回以上欠席	1 (1%)	2 (3%)	0 (0%)	1 (1%)
計 (人)	142(100%)	74(100%)	129(100%)	114(100%)

※括弧内の%は同学科内に占める割合（基本的に小数点以下四捨五入だが、全体で100%になるよう調整）

表3. 自分自身や“自分の人生”を考える上で参考になったかについて（学科別）

	人間科学科	保育子ども学科	国際社会学科	国際コミュニケーション学科
とてもそう思う	29 (20%)	20 (27%)	40 (31%)	19 (16%)
そ う 思 う	94 (66%)	49 (66%)	74 (57%)	76 (67%)
あまりそう思わない	16 (11%)	5 (7%)	14 (11%)	18 (16%)
全くそう思わない	3 (3%)	0 (0%)	1 (1%)	1 (1%)
計 (人)	142(100%)	74(100%)	129(100%)	114(100%)

※括弧内の%は同学科内に占める割合（基本的に小数点以下四捨五入だが、全体で100%になるよう調整）

しかし自由記述欄を見ると、「無記入」と書いていたり、「なぜキャリア設計をするのか」、「最初のうちはキャリア設計の授業の意味がそもそもわからなかった。そのためなぜ受ける必要があるのか疑問だった」と書いてあるものもある。初回授業時、本科目の意義と目的を丁寧に説明する必要があると思われる。

全体としてある程度の満足は得られたのであるとすれば、とりわけ何が受講者の考え方や行動に影響を及ぼしたのだろうか。各回の授業の中で、どのようなプログラムが効果的なのかを検証するために、「キャリア設計Ⅰ」の14回の授業のうち、自分に影響を与えたプログラムを選択してもらった。今回の設問の中で「影響を与えた」とは、「その授業によって意識が変わったり、行動が変わったりしたこと」であると注釈をつけている。回答の際に、1番影響を与えたものから3番目までを選択してもらった。この設問に関しては、回答の仕方をグループ別に検討するためクラスタ分析を行ったので、詳細は後述する。

3-3. 分析・考察

3-3-1. 影響を受けたプログラムの回答型の分析

本科目のプログラムの中で何が受講者に影響を及ぼしたのかを問う設問3～5に対し、1番から3番目までにどのプログラムを選ぶのか、クラスタ分析によって受講者の回答の型別にクラスタを分類した。受講者にとって満足度の高い授業にはある程度の傾向が見られ、類似性の高いグループを分類し、その学生群の傾向・特徴をもとに考察を進めていく。

今回の分析手順は、Q3-Q5「キャリア設計Ⅰ」の14回の授業のうち、Q3は、最も自分に

表4. 最も影響を与えたプログラム（学科別）

	人間科学科	保育子ども学科	国際社会学科	国際コミュニケーション学科
オリエンテーション	2 (1%)	0 (0%)	1 (1%)	3 (3%)
Y氏による講演(「自分の人生」をどう生きるか)	22 (15%)	4 (5%)	17 (13%)	17 (15%)
S氏による講演(「18歳の私へ」)	8 (6%)	1 (2%)	9 (7%)	4 (3%)
輪講(5人の担当教員による授業)	10 (7%)	6 (8%)	6 (5%)	4 (3%)
働く人への聴き取り調査	9 (6%)	5 (7%)	7 (5%)	4 (3%)
上級生による講演会	32 (23%)	2 (3%)	17 (13%)	20 (18%)
社会人基礎力(英和OGの映像視聴)	4 (3%)	0 (0%)	4 (3%)	5 (5%)
卒業生による講演会	27 (20%)	49 (66%)	53 (41%)	42 (37%)
自己分析(相互インタビュー)	22 (15%)	4 (5%)	11 (9%)	7 (6%)
Oさん(英和OG)からのメッセージ	6 (4%)	3 (4%)	4 (3%)	7 (6%)
その他(特になし)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (1%)
計(人)	142(100%)	74(100%)	129(100%)	114(100%)

※括弧内の％は同学科内に占める割合（基本的に小数点以下四捨五入だが、全体で100%になるよう調整）

影響、Q4は、2番目に影響、Q5は、3番目に影響を与えたプログラムを1つ選んでくださいという問いの選択肢（1. オリエンテーション、2. Y氏による講演「“自分の人生”をどう生きるか」、3. S氏による講演「18歳の私へ」、4. 輪講（5人の担当教員による授業）、5. 働く人への聴き取り調査、6. 上級生による講演会、7. 社会人基礎力（英和OGの映像視聴）、8. 卒業生による講演会、9. 自己分析（相互インタビュー）、10. Oさん（英和OG）からのメッセージ、11. その他）の回答の有無を変数とし、すべてに回答のある459人の階層的クラスタ分析（Ward法 平方ユークリッド距離）を行った。階層的クラスタ分析は、関連性の高い個々のデータを結合し、小さなクラスタをつくり、それらのクラスタを結合して大きなクラスタを階層的に形成する手法⁴である。最終的に5つのクラスタでの考察を試みることにした。

クラスタ1はあらゆる選択肢が含まれた型で、258人該当した。クラスタ2は第2位に「卒業生講演会」、第3位に「輪講」を選んでいるのが特徴で、58人含まれた。クラスタ3は第1位に「卒業生講演会」を選択し、第2位に「働く人への聴き取り調査」か「上級生講演会」を選ぶ傾向が強いのが特徴で、82人が該当した。クラスタ4は第1位に「卒業生講演会」を選択しただけでなく、第2位に「上級生講演会」か「働く人への聞き取り調査」を選択する傾向が強く、第3位に「自己分析」を選択しているのが特徴で、27人含まれた。最後に、クラスタ5は第1位に「卒業生講演会」、第2位に「上級生講演会」、第3位に「Y氏による講演」か「働く人への聞き取り調査」を選択する傾向が強いのが特徴で、34人であった。

次に、前述のクラスタ分析をもとに学科別の分析を行った結果は、表6の通りである。

クラスタ3では、含まれている学科別の受講者の割合に保育子ども学科の割合が高い傾向が見られた。質問紙への回答傾向の要因として、「保育子ども学科」の特徴が何らかの影響を及ぼしていると考えられる。表7にある通り、クラスタ3は無欠席が58%で、5つのクラスタ中、最も高い数値である。また、表9が示すように「最も影響を与えたプログラム」として卒業生講演会を選んだ者が82人中81人（99%）と、ほぼ独占している。表4で既に見た通り、保育子ども学科では66%（49人）の受講者が「最も影響を与えたプログラム」として卒業生講演会を選んでいる。これは他学科の数値と比べて突出している。保育子ども学

表5. クラスタ別の受講者数（全回答者：459（100%））

クラスタ1	クラスタ2	クラスタ3	クラスタ4	クラスタ5
258 (56%)	58 (13%)	82 (18%)	27 (6%)	34 (7%)

※括弧内の％は全体に占める当該クラスタの割合（基本的に小数点以下四捨五入だが、全体で100%になるよう調整）

4. 篠原正典（2016）『教育実践研究の方法』ミネルヴァ書房、p.44

科の受講者は、他の学科に比べて卒業後の就職を見据えて進学してきており、将来像を明確に描いて受講していることがこの回答の特徴を反映している可能性がある。

他学科については、クラスごとに人数の配分に大きな差を認めないことから、学科による違いはあまりないと考えた。

3-3-2. 学生が求めている内容

各クラスタの学生群がどのような特徴をもつのかを掴むために、設問8～10の自由記述項目のテキストマイニングを行う。表現された言葉の選択が恣意的・主観的とならないよう、客観性を担保するため、計量テキスト分析の手法を採用した。本研究では樋口耕一氏が開発したテキストマイニング用アプリケーションのKH Coderを用いた。⁵ 尚、本分析ではクラスタ4及びクラスタ5において、十分な自由記述データを得られなかったため、クラスタ1、クラスタ2及びクラスタ3を対象としてテキストマイニング分析を行うこととする。クラスタごとに集計した自由記述データについて表12に示す。

表6. 各クラスタの学科別人数

	クラスタ1	クラスタ2	クラスタ3	クラスタ4	クラスタ5	計
人間科学科	100 70.42%	22 15.49%	10 7.04%	5 3.52%	5 3.52%	142
保育子ども学科	29 39.19%	6 8.11%	27 36.49%	5 6.76%	7 9.46%	74
国際社会学科	67 51.94%	14 10.85%	29 22.48%	8 6.20%	11 8.53%	129
国際コミュニケーション学科	62 54.39%	16 14.04%	16 14.04%	9 7.89%	11 9.65%	114

表7. クラスタの出欠状況

出欠状況	クラスタ1	クラスタ2	クラスタ3	クラスタ4	クラスタ5
無 欠 席	112 (44%)	26 (45%)	47 (58%)	15 (56%)	16 (47%)
1 回 欠 席	76 (29%)	19 (33%)	19 (23%)	6 (22%)	8 (24%)
2～4回欠席	68 (26%)	12 (21%)	15 (18%)	6 (22%)	10 (29%)
5回以上欠席	2 (1%)	1 (1%)	1 (1%)	0 (0%)	0 (0%)
計 (人)	258(100%)	58(100%)	82(100%)	27(100%)	34(100%)

※括弧内の％は同クラスタ内に占める割合（基本的に小数点以下四捨五入だが、全体で100%になるよう調整）

5. 樋口耕一（2014）『社会調査計量テキスト分析：内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版

表8. 自分自身や“自分の人生”を考える上で参考になったかについて（クラスタ別）

	クラスタ1	クラスタ2	クラスタ3	クラスタ4	クラスタ5
とてもそう思う	55 (21%)	17 (29%)	21 (26%)	9 (33%)	6 (18%)
そう思う	158 (61%)	39 (68%)	58 (71%)	17 (63%)	21 (62%)
あまりそう思わない	40 (16%)	2 (3%)	3 (3%)	1 (4%)	7 (20%)
全くそう思わない	5 (2%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
計 (人)	258(100%)	58(100%)	82(100%)	27(100%)	34(100%)

※括弧内の％は同クラスタ内に占める割合（基本的に小数点以下四捨五入だが、全体で100%になるよう調整）

表9. 最も影響を与えたプログラム（クラスタ別）

プログラム	クラスタ1	クラスタ2	クラスタ3	クラスタ4	クラスタ5
オリエンテーション	6	0	0	0	0
Y氏による講演(「“自分の人生”をどう生きるか」)	55	5	0	0	0
S氏による講演(「18歳の私へ」)	21	0	1	0	0
輪講(5人の担当教員による授業)	26	0	0	0	0
働く人への聴き取り調査	23	2	0	0	0
上級生による講演会	38	33	0	0	0
社会人基礎力(英和OGの映像視聴)	13	0	0	0	0
卒業生による講演会	15	14	81	27	34
自己分析(相互インタビュー)	43	1	0	0	0
Oさん(英和OG)からのメッセージ	17	3	0	0	0
その他(特になし)	1	0	0	0	0
計(人)	258	58	82	27	34

表10. 2番目に影響を与えたプログラム（クラスタ別）

プログラム	クラスタ1	クラスタ2	クラスタ3	クラスタ4	クラスタ5
オリエンテーション	4	0	2	0	0
Y氏による講演(「“自分の人生”をどう生きるか」)	31	4	13	0	0
S氏による講演(「18歳の私へ」)	19	1	7	0	0
輪講(5人の担当教員による授業)	15	0	15	0	0
働く人への聴き取り調査	49	0	6	11	0
上級生による講演会	45	10	2	16	34
社会人基礎力(英和OGの映像視聴)	16	1	5	0	0
卒業生による講演会	35	29	1	0	0
自己分析(相互インタビュー)	34	9	20	0	0
Oさん(英和OG)からのメッセージ	6	4	11	0	0
その他(特になし)	4	0	0	0	0
計(人)	258	58	82	27	34

また、テキストマイニング分析を行う際には、助詞・助動詞を除いた語句を分析の対象語句とし、最小出現数は3とした。これにより、クラスタ1では30語、クラスタ2では34語、クラスタ3では31語が抽出された。各クラスタにおいて出現頻度の高かった上位3位の語句を表13に示す。

Q10「もっと知りたいと思ったこと」において、各クラスタから抽出された単語として、特徴的なものを以下に示す。

クラスタ1：「人」「先輩」「設計」

クラスタ2：「講演」「話」「思う」

クラスタ3：「社会」「知る」「人」「聞く」

抽出された単語から共起ネットワーク分析をし、自由記述の可視化をしたのが次ページ以降の図1～3である。共起ネットワーク分析は出現パターンの似通った(共起の程度が強い)単語を線で結んだネットワークを示したものである。出現数の多い単語ほど大きい円で描かれ、共起関係が強いほど太い線で結ばれる。またネットワークの中で中心的な役割を果たす

表11. 3番目に影響を与えたプログラム（クラスタ別）

プログラム	クラスタ1	クラスタ2	クラスタ3	クラスタ4	クラスタ5
オリエンテーション	13	0	0	0	0
Y氏による講演（「“自分の人生”をどう生きるか」）	25	5	5	0	14
S氏による講演（「18歳の私へ」）	19	2	7	0	6
輪講（5人の担当教員による授業）	10	36	0	0	0
働く人への聴き取り調査	46	5	28	0	9
上級生による講演会	37	0	21	0	0
社会人基礎力（英和OGの映像視聴）	12	5	9	0	0
卒業生による講演会	34	0	1	0	0
自己分析（相互インタビュー）	38	3	6	27	0
Oさん（英和OG）からのメッセージ	16	0	4	0	5
その他（特になし）	8	2	0	0	0
その他（グループワーク）	0	0	1	0	0
計（人）	258	58	82	27	34

表12. 分析に使用した自由記述データ

クラスタ名	データ件数	文の数	総抽出語数	異なり語数
クラスタ1	258	264	1804	364
クラスタ2	58	60	521	178
クラスタ3	82	84	512	165
計	398	408	2837	707

単語の色が、より濃く表現される。

受講者の自由記述は元データそのものが単語しか書かれていない（文章として表現されていない）例もあり、個別に記述を確認しても真意が汲み取れないケースもある。ここでは全体的な傾向を可視化することに重きをおき、それぞれのクラスタの特徴を分析した。

図1から、クラスタ1の学生群は「人」「先輩」「卒業生」の「話」を「聞く」、「職業」を「知る」ことをもっと知りたいと考えていることがわかる。「様々」な「職業」について知りたいということも見えてくる。

クラスタ2も、クラスタ1と同様に、「卒業生」「先輩」の「講演」「話」を「聞く」という文脈が浮かび上がってくるが、クラスタ1と異なり、具体的な「航空」「メディア」「保育」といった単語や「就職」「活動」があり、自身の希望する「業界」がある程度定まっている学生群なのではないかと推察される。一方で「様々」な「職業」という単語もあり、視野を広げることも重要だと考えているのではないだろうか。

表 13. 頻出語句の出現頻度

クラスタ名	頻出語句1位	頻出語句2位	頻出語句3位
クラスタ1	知 る (28)	思 う (22)	聞 く (21)
クラスタ2	聞 く (8)	卒業生 (8)	人 (7)
クラスタ3	話 (11)	聞 く (8)	卒業生 (7)

() は出現回数

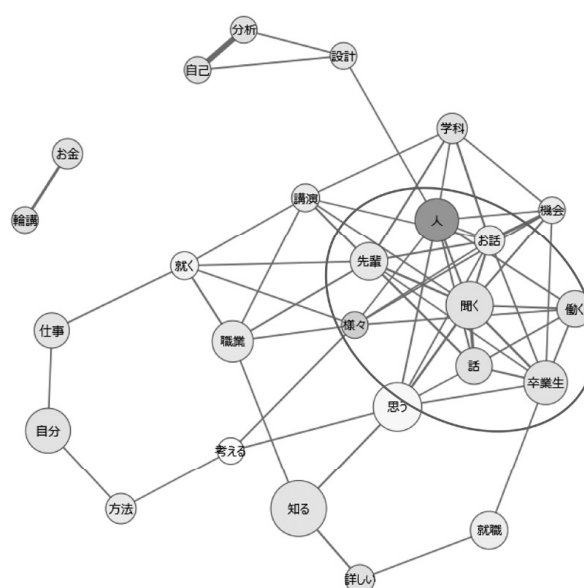


図1. クラスタ1の「もっと知りたいと思ったこと」に関する共起ネットワーク

以上の結果から、クラスタ1に比べ、クラスタ2、クラスタ3の方がより広い範囲の知識

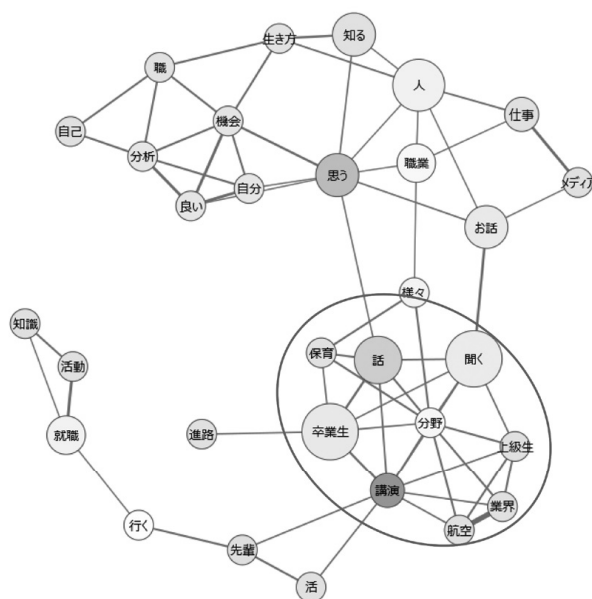


図2. クラスタ2の「もっと知りたいと思ったこと」に関する共起ネットワーク

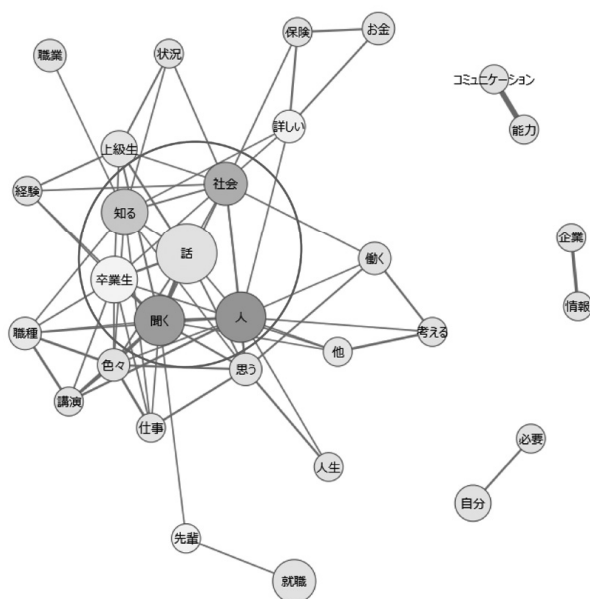


図3. クラスタ3の「もっと知りたいと思ったこと」に関する共起ネットワーク

を求めているような傾向が読み取れる。クラスタ3に保育子ども学科が多いことから、クラスタ3の受講者は、将来像が明確（専門職になろうと決意して入学している）だからこそ、視野を広げるためにも「社会」を意識しているのではないかと推察する。

続いて、学科と本科目へのニーズの関連性を明らかにするため、各クラスタにおける学科ごとの人数についてカイ二乗検定を施した。その結果、「人間科学科×保育子ども学科」、「人間科学科×国際社会学科」、「保育子ども学科×国際コミュニケーション学科」において、有意水準1%以下で有意差が認められ、「人間科学科×国際コミュニケーション学科」は、有意水準5%以下で有意差が認められた。他方、「保育子ども学科×国際社会学科」、「国際社会学科×国際コミュニケーション学科」には有意差が認められなかった。この結果から、人間科学科について、他学科と比較して各クラスタにおける人数の比率の傾向が異なることから、本科目に対するニーズに特異性がある可能性が指摘される。また、保育子ども学科と国際社会学科について、クラスタに含まれる人数比率に類似傾向がみられたことから、本科目に対して似たようなニーズを持っている可能性がある。具体的には、大学卒業後の進路について、ある程度明確な目標を持っているという点で共通の傾向がみられた可能性が考えられる。この点については、今後、さらに検証を行う必要がある。

卒業後の進路の方向性が定まっている学生とそうでない者では、当然のことながらキャリア関連科目に求める事柄が異なってしまう、すべての学生にとって満足のいく授業を設計することは困難である。例えば、表4の結果に見られるように、人間科学科の受講者は「自己分析」のワークへの評価が高い。最も影響を受けた授業として「自己分析」を選んだ受講者の半分（22 / 44人）が人間科学科である。他学科の受講者と比べ、自身の興味・関心が自己の内面に向かっていることが、本研究からも明らかである。加えて、卒業生による講演会よりも上級生から影響を受けていることも数字に表れている。他の3学科では、いずれも卒業生による講演会が最も人気が高いにもかかわらず、人間科学科では上級生による講演会が1位（32人）である。「ソト」にいる卒業生より、年齢的に近く「ウチ」（学内）にいる上級生から、より刺激を受けるのではないだろうか。他方、保育子ども学科の受講者は、上級生（2人）よりも卒業生（49人）による講演会を支持している。これは保育者を目指す学生にとって、同じ学科を卒業して夢を実現した先輩に会うということが、大きな価値を生んでいるということだろう。同様に、本学への進学時にはエアライン業界への就職希望者が多い国際社会学部の学生にとっては、卒業生講演会で空港勤務の先輩に会うということが、自身の意識や行動に変容をもたらすのである。本科目を通じてロールモデルを見つけた受講者は、上級生なり卒業生の講演会を選択しているものと思われる。

3-4. まとめ

本研究の目的は、受講者が回答した質問紙調査結果から導き出された分析・考察をもとに、その潜在的な学生の要望や思いを掘り起こし、可視化することであった。上記の分析と考察から明らかになったことは、次の3点である。学生が求めるプログラムには、卒業後の進路決定の有無が作用している。また、希望する職業や進路が決まっている者は、企業や社会といった「ソト」に目を向けている傾向が見られる。そして上級生、卒業生による講演会は、いずれも受講者からの支持が高いため、今後も先輩（現役英和生、OG）と入学して間もない学生との接点をつくることは有効である。

4. おわりに

2010年度より開講され、2018年度まで9年間継続した「キャリア設計」という科目がもたらした成果は、まず英和生の縦の繋がりを構築したことである。卒業生による講演会を開催したこと、そしてその効果をもとに、2015年度より上級生による講演会を設けたことが受講者に与えた影響は大きい。今年度「上級生講演会」に登壇した3年生は、「1年生の時に上級生講演会を聴き、自分もあそこに立てるような人になろうと思った」と語っていた。自分もあなりたい、なれるかもしれないと思えるような「憧れ」の存在やロールモデルが、大学内にいることは重要である。上級生講演会を加えたことは授業改善の成功例のひとつといえよう。

次に、企業人による講演会である。現在は成功しているように見える企業の代表も、学生時代に挫折を経験しているという話が、受講者には驚きをもって受け止められ、同時に共感を呼んでいる。2018年度に初めて登壇された講師により、その点が顕著となった。

課題としては、一部ではあるものの、最後まで本科目に対して否定的な感情をもったまま授業を終えることになった者がいる点である。冒頭に述べた通り、東洋英和女学院大学のキャリア教育はどうあるべきかを考えるには、まずキャリア教育とは何か（WHAT）を知らねばならない。そして、なぜキャリア教育をするのか（WHY）を理解する必要がある。それらの大前提を学生とも共有しなければならない。それがいかに難しいかを示したのも「キャリア設計」の9年間である。

最後に、今後の展望について。本稿では分析・考察の対象から除外したが、本科目におけるペアワーク、グループワークも受講者からの評価は高い。受講者が、講演を聴くという講義型の授業ばかりを好むわけではないことを補記しておく。学生主体の参加型授業の研究については更に研究を進め、別の機会に譲りたい。

謝辞

本研究のために質問紙調査に協力してくれた、2018年度「キャリア設計Ⅰ」受講者の皆様に心より御礼申し上げます。

参考文献

- 越中康治, 高田淑子, 木下英俊, 安藤明伸, 高橋潔, 田幡憲一, 岡正明, 石澤公明 (2015) 「テキストマイニングによる授業評価アンケートの分析：共起ネットワークによる自由記述の可視化の試み」『宮城教育大学情報処理センター研究紀要：COMMUE』第22号, pp.67-74
- 落合一泰 (2017) 「学びの鏡としての受講者感想：明星大学の初年次教育「自立と体験Ⅰ」(2010-2016)の9,270例は何を語るか」『明星：明星大学明星教育センター研究紀要』第7号, pp.27-38
- 金山喜昭, 児美川孝一郎, 武石恵美子 (2014) 『キャリアデザイン学の招待—研究と教育実践—』ナカニシヤ出版
- 釜賀誠一 (2015) 「テキストマイニングを用いた授業評価の自由記述の分析と対策」『尚絅大学研究紀要, A, 人文・社会科学編』第47号, pp.49-61
- 川崎末美, 澁谷隆良, 坪内千明, 町田小織 (2013) 「東洋英和女学院大学初年次前期必修科目『キャリア設計』の成果と課題—大学生活およびキャリア形成に対する意識の変化という観点からの検討—」『人文・社会科学論集』東洋英和女学院大学, 第31号, pp.81-122
- 桐村豪文, 光成研一郎, 國崎大恩, 牛頭哲宏, 高松邦彦, 伴仲謙欣, 中田康夫 (2018) 「初年次教育科目『まなぶる➤ときわびとⅠ』で何を得たか～計量テキスト分析による学生が捉える学修の〈意味〉～」『神戸常盤大学紀要』第11号, pp.193-208
- 児美川孝一郎 (2014) 「今、ここにあるキャリア教育へ」『教育（特集 キャリア教育をつくりかえる）』かもがわ出版, 821号, pp.5-12
- 篠原正典 (2016) 『教育実践研究の方法』ミネルヴァ書房
- 須田昂宏 (2017) 「リアクションペーパーの記述内容に基づく学生の学びの可視化：大学授業の実態把握のために」『日本教育工学会論文誌』41(1), pp.13-28
- 林文, 川崎末美, 坪内千明, 有田富美子 (2011) 「東洋英和女学院大学卒業生のライフコースを考える—2010年卒業生調査から—」『人文・社会科学論集』東洋英和女学院大学, 第29号, pp.39-86
- 樋口耕一 (2014) 『社会調査計量テキスト分析：内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版

参考資料

資料① 質問紙設問項目

Q 1. 「キャリア設計 I」の出欠席について確認します。以下の選択肢より1つ選んでください。

1. 無欠席
2. 1回欠席
3. 2～4回欠席
4. 5回以上欠席

Q 2. あなたにとって「キャリア設計 I」は、自分自身や“自分の人生”を考える上で参考になりましたか？

1. 全くそう思わない
2. あまりそう思わない
3. そう思う
4. とてもそう思う

Q 3. 「キャリア設計 I」の14回の授業のうち、最も自分に影響を与えた*回を選んでください。*その授業によって意識が変わったり、行動が変わったりした。

1. オリエンテーション
2. Y氏による講演（「“自分の人生”をどう生きるか」）
3. S氏による講演（「18歳の私へ」）
4. 輪講（5人の担当教員による授業）
5. 働く人への聴き取り調査
6. 上級生による講演会
7. 社会人基礎力（英和OGの映像視聴）
8. 卒業生講演会
9. 自己分析（相互インタビュー）
10. Oさん（英和OG）からのメッセージ
11. その他（ ）

理由も答えてください。（自由記述）

（ ）

Q 4. 「キャリア設計Ⅰ」の14回の授業のうち、2番目に影響を与えた*回を選んでください。

*その授業によって意識が変わったり、行動が変わったりした。

1. オリエンテーション
2. Y氏による講演（「“自分の人生”をどう生きるか」）
3. S氏による講演（「18歳の私へ」）
4. 輪講（5人の担当教員による授業）
5. 働く人への聴き取り調査
6. 上級生による講演会
7. 社会人基礎力（英和OGの映像視聴）
8. 卒業生講演会
9. 自己分析（相互インタビュー）
10. Oさん（英和OG）からのメッセージ
11. その他（ ）

理由も答えてください。（自由記述）

（ ）

Q 5. 「キャリア設計Ⅰ」の14回の授業のうち、3番目に影響を与えた*回を選んでください。

*その授業によって意識が変わったり、行動が変わったりした。

1. オリエンテーション
2. Y氏による講演（「“自分の人生”をどう生きるか」）
3. S氏による講演（「18歳の私へ」）
4. 輪講（5人の担当教員による授業）
5. 働く人への聴き取り調査
6. 上級生による講演会
7. 社会人基礎力（英和OGの映像視聴）
8. 卒業生講演会
9. 自己分析（相互インタビュー）
10. Oさん（英和OG）からのメッセージ
11. その他（ ）

理由も答えてください。（自由記述）

（ ）

1. シート執筆
2. グループワーク
3. プレゼンテーション
4. インタビュー
5. ポートフォリオ
6. 4学科混合
7. ゲスト（企業人、上級生、OG）
8. その他（ ）

1. 文章で論理的に説明する力
2. 自分の言いたいことを聞き手に伝える力
3. 傾聴力
4. 振り返る（内省）力
5. 他者と協働する力
6. 多様性を理解する力
7. タイム・マネジメント力
8. その他（ ）

資料② シラバス

〈テ ー マ〉

将来のキャリアと学生生活を設計する

〈内 容〉

学生時代は若者が大人になる前に、さまざまな体験をしながら自分の生き方の可能性を探ったり、自分の夢を実現するための力を獲得するために、社会で働くことを猶予されている“モラトリアム”の期間です。

本科目では、このモラトリアム期を意義のあるものにするために、働くことや人生設計に関わる講義や企業経営者・卒業生の講演を聞いたりして、将来の生き方について考えます。それをふまえて、大学生活の計画を立てます。

この計画を実行し、省察し、必要ならば軌道修正をしたりする、こうした流れをサポートするポートフォリオの作成の仕方についても学びます。

皆さんにとって英和の4年間が、充実した学びと経験の詰まった時となり、満足のいく人生になることを願ってこの科目を設置しています。

〈到達目標〉

1. 将来設計や社会で働くためのさまざまな知識を獲得する
2. 自分の長所や適性を知る
3. 健康と体力の保持・増進のための運動・食事・睡眠を習慣づける
4. ポートフォリオを使いこなす
5. 将来設計にむけた学生生活のプランを実行する

〈学習内容〉

様々な職業、就職先としての企業や諸機関の雇用条件や労働環境を調べる。

様々な職業に就いている本学の卒業生の体験談を聞くなどして、女性が働く場合の問題や女性の可能性について考える。

資料③ 教科書目次

第Ⅰ部／講演会

1 章：「18歳の私へ ～昨日とは違う世界をドライブするためのライセンス～」

2 章：「“自分”の人生をどう生きるか」

第Ⅱ部／輪講

1 章：キャリアアップの基盤を整える ～健康と体力の視点から～

2 章：働き方を考える ～自分のなかに歴史をよむ～

3 章：働き方を考える ～心理学の視点から～

4 章：働き方を考える ～社会保障の視点から～

5 章：働き方を考える ～お金のことについて学ぶ～

第Ⅲ部／ワークショップ

1 章：4年間の学びと新たな自己の発見

2 章：なりたい自分に向かって

資料④ 2018年度「キャリア設計Ⅰ」授業計画

	内 容
第 1 回	オリエンテーション（授業の目的、進め方、シートの活用法、ポートフォリオの説明）
第 2 回	a b c クラス／企業人・社会人による講演会（Y氏）
	d e クラス／企業人・社会人による講演会（S氏）
第 3 回	a b c クラス／企業人・社会人による講演会（S氏）
	d e クラス／企業人・社会人による講演会（Y氏）
第 4 回	輪 講
第 5 回	輪 講
第 6 回	輪 講
第 7 回	輪 講
第 8 回	輪 講
第 9 回	ワークショップ① 働く人への聴き取り調査（事前のインタビューとグループ発表による）
第10回	上級生による講演会（「学士力」を身につけよう／先輩からのメッセージを生かそう）
第11回	ワークショップ② 社会人に求められる力 （事前の社会人基礎力テスト＆卒業生のインタビュービデオを見て考える）
第12回	卒業生による講演会（6月30日（土）） 国際社会学部・人間科学科・保育子ども学科の3クラスで
第13回	ワークショップ③ 自己分析（自己の多面的理解と相互インタビュー）
第14回	まとめ（半期の学びを振り返り、改めて今後の生活について考える）
第15回	試 験（5回の輪講の内容から出題）

資料⑤ 2018年度「キャリア設計Ⅰ」の進め方

(1) クラス別進行予定一覧表

	クラス(教室) 授業内容	aクラス (5201)	bクラス (9006)	cクラス (8101)	dクラス (5101)	eクラス (5204)
第1回(4/11)	オリエンテーション	町田	長谷川	酒井	坪内	澁谷
第2回(4/18)	講演会①	Y氏(5201)			S氏(5101)	
第3回(4/25)	講演会②	S氏(5201)			Y氏(5101)	
第4回(5/9)	輪講①	町田	長谷川	酒井	坪内	澁谷
第5回(5/16)	輪講②	澁谷	町田	長谷川	酒井	坪内
第6回(5/23)	輪講③	坪内	澁谷	町田	長谷川	酒井
第7回(5/30)	輪講④	酒井	坪内	澁谷	町田	長谷川
第8回(6/6)	輪講⑤	長谷川	酒井	坪内	澁谷	町田
第9回(6/13)	ワークショップ①	町田	長谷川	酒井	坪内	澁谷
第10回(6/20)	上級生講演会	上級生(5201)			上級生(5101)	
第11回(6/27)	ワークショップ②	町田	長谷川	酒井	坪内	澁谷
第12回(6/30)	卒業生講演会	国際社会(5201) 人間科学(5101) 保育子ども(5101)				
第13回(7/4)	ワークショップ③	町田	長谷川	酒井	坪内	澁谷
第14回(7/11)	まとめ	町田	長谷川	酒井	坪内	澁谷
第15回(7/18)	試験	町田	長谷川	酒井	坪内	澁谷

*第12回『卒業生講演会』は土曜日3限の開催

卒業生講演会登壇者一覧

〈人間科学科〉

- ①政府金融機関(1997年卒)
- ②大学講師(2004年卒)
- ③臨床心理士(2014年卒)

〈保育子ども学科〉

- ①児童養護施設職員(2012年卒)
- ②公務員保育士(2015年卒)
- ③キリスト教幼稚園教諭(2016年卒)

〈国際社会学部(国際社会学科、国際コミュニケーション学科合同)〉

- ①リクルーティングアドバイザー(2017年卒)
- ②航空物流(2017年卒)
- ③羽田空港グランドスタッフ(2017年卒)

Feedbacks on programs of the Career Design I,
Compulsory Course for First-Year Students, and an
attempt at visualization of students' tacit demands
— Through the cluster analysis and
text mining of the questionnaires —

MACHIDA Saori,
SAKAI Kyohei,
HASEGAWA Akihiro

Abstract

In order to grasp the students' needs and wants for career education, it is necessary to visualize their opinions and thoughts in their classes as data. In this research, the authors adopted cluster analysis to classify several groups who were influenced by same programs, and text mining as an objective analysis to comprehend their reflections. As a result, the program they want depends on their vision after graduation or lack thereof. If the students have dreams or plans for their own future, there is a tendency to be social-minded. The students find it positive that the first-year students have opportunities to encounter their seniors and alumnae in their university, who could be their role model.

The authors insist that it is important for professors to share the reason with the students, why they need to take career education. Furthermore, they should explain the purpose of this subject to the students time and again, to deepen their understanding and to enhance their readiness.

執筆者一覧

List of Contributors

平 体 山 美

HIRATAI Yumi

教授（アメリカ史）

Professor (History of the U.S.)

長 尾 敦 子

NAGAO Atsuko

准教授（英語教育）

Associate Professor (English Education)

廣 部 朋 美

HIROBE Tomomi

任期制嘱託講師（幼児教育学）

Lecturer (Early childhood Education)

町 田 小 織

MACHIDA Saori

専任講師（キャリア教育）

Lecturer (Career Education)

酒 井 郷 平

SAKAI Kyohei

助教（教育工学、情報教育）

Instructor

(Educational Technology, Information Education)

長谷川 明 弘

HASEGAWA Akihiro

准教授（臨床心理学）

Associate Professor (Clinical Psychology)

『論集』執筆要項

1. 投稿は、未発表のオリジナル原稿に限ります。
2. 原稿は和文または英文とし、3部ご提出ください。そのうち2部は、無記名でお願いします。審査される査読者にお渡しいたします。
3. 原稿が和文の場合は、英文（400語以内）の要約文、原稿が英文の場合は和文の要約（200字以内）を作成し、それぞれを母語とする先生に見ていただくなどして完成させてから原稿とともに3部ご提出ください。
4. 原稿は、和文の場合は10.5ポイントで41字×33行、英文の場合は12ポイントで33行程度としてください。論文1編当たりの字数（注記、図版類を含む）は、原則として2万字以内、英文の場合は12,000単語以内です。
5. 本文の冒頭に、検索用のキーワードを付してください。3～5語の日本語と英語、および必要であればその他の外国語を明記してください。
6. 査読結果に基づいて改稿したのち、入稿用の最終原稿には電子データ（ディスクなど）も添えてご提出ください。またその際、必要なソフト名や保存方法など必要事項を明記してください。
7. 肩書き（日本語・英語）、専門分野（日本語・英語）も入稿用の印字原稿と電子データの中にお書き添えください。
8. 抜き刷りは、単著、共著の別なく、論文、研究ノート1件につき50部贈呈いたします。これを超えて増刷を希望される方は、有料にて承ります。必ず論文提出時に超過分部数を申し出てください。
9. 原稿料の支払いはありません。
10. 掲載された論文等の著作権は、原則として論集委員会に帰属し、本文はすべて本学図書館リポジトリにおいてPDFファイルによって公開されます。ただしこのことは、著作者が他の電子媒体等にて公開することを妨げるものではありません。論文等の掲載にあたっては、この件をご了承いただいたものとみなします。

（2018年2月2日『論集』編集委員会）

編集後記

『人文・社会科学論集』第36号をお届けいたします。今年度は、論文1本と研究ノート3本の合計4本の掲載となりました。お忙しい中、丁寧な査読をいただきました先生方に深く感謝申し上げます。

この『論集』は、日ごろの研究の成果を発表する場であり、また、相互の研鑽と新しい研究のための場でもあります。さらなる充実のために、皆様のご協力をお願い申し上げます。

2019年1月 小坂和子

研究論集委員会

小坂 和子（委員長）

秋本 倫子 大林 雅之 奥山 礼子

前田 文雄 吉川 健治

人文・社会科学論集 第36号（2018年度）

2019年3月発行

発行 東洋英和女学院大学

〒226-0015 横浜市緑区三保町 32

印刷 東洋英和女学院大学ドキュメントセンター

Contents

Articles

HIRATAI Yumi

The smallpox epidemic and efforts for the construction of public health infrastructures in North Carolina: local health agencies, medical license requirements, and adequate vaccine supplies, 1898-1909..... 1

Research Notes

NAGAO Atsuko

Some Ideas for Grammatical Instructions Based on Error Analysis 23

HIROBE Tomomi

Diversity of Children’s Imitation Patterns in a 1-year-old Class 41

MACHIDA Saori, SAKAI Kyohei, HASEGAWA Akihiro

Feedbacks on programs of the Career Design I, Compulsory Course for First-Year Students, and an attempt at visualization of students’ tacit demands — Through the cluster analysis and text mining of the questionnaires —... 53